

愛媛医学会賞に宮上氏

奨励賞は重松・多田・中島氏

県医師会員らでつくる愛媛医学会(村上博会長)は、このほど、医学や地域医療の進歩向上に貢献した医師を表彰する第27回愛媛医学会賞に1人、若手医師らを選んだ。

松山病院脳神経内科の宮上紀之医師(30)を選出した。宮上氏は、小脳症状が主体の疾患・骨髄小脳変性症2型(SCA2)の患者に脳内のドーパミントランスポーター(DAT)について調べる検査を行った結果、DATの減少が特徴的なパーキンソン症状を主体とする症例以外でも、減少

が認められたと説明。検査がSCA2の潜在的なパーキンソン症状を検出できる可能性があり、治療や生活の質改善につながることを示唆した。

医学会奨励賞は、県立中央病院循環器内科の重松達哉医長(32)、愛媛大大学院医学系研究科薬物療法・神経内科学の多田聡助教(30)、自治医科大整形外科の中島光晴シニアレジデント(36)の3人が受賞。

重松氏は、高齢期の大動脈二尖弁(せんべん)に伴う重症大動脈弁狭窄(きょうさく)症の患者に、経カテーテル大動脈弁留置術で安全に治療を行える場合があると明らかにした。

多田氏は、パーキンソン病の鑑別によく用いる二つの画像検査で、発症してから2年間、発症が認められない結果が出た事例を報告。画像所見だけでなく臨床症状に基づいて診断・治療する重要性を示した。

中島氏は、脊椎の神経を包む硬膜の腹側に突出することが多い腰椎椎間板ヘルニアが、硬膜の背側に出た症例を取り上げた。背側にできた腫瘤(しゅりゅう)を術前の磁気共鳴画像装置(MRI)検査で鑑別することは困難であり、ヘルニアも念頭に置く必要性を指摘した。

5月11日に松山市三番町4丁目の県医師会館で授賞式がある。(桑原大輔)



宮上 紀之氏



重松 達哉氏



多田 聡氏



中島 光晴氏